

---

# 地球外生命体、あるいは異世界の生命体が地球を襲う理由を考察する座談会

のみのみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地球外生命体、あるいは異世界の生命体が地球を襲う理由を考察する座談会

### 【Nコード】

N9913M

### 【作者名】

のみのみの

### 【あらすじ】

座談会シリーズ第一弾。第二弾があるかなんて知らない。タイトルが粗筋の全てです。

ミステリー同好会。

隣接する超自然研究会と文芸部を、まるでその位置関係を表すかのように、足して二で割った様な活動をしている。

会員は五人。

会長の田端美千は三年生。古今東西のありとあらゆる推理小説を読んできたと噂される兵だ。実際、様々なことを整理してそれを昇華させることにはたけているが、如何せんその向かう先はファンタジックになる。

副会長の溝口武須加は二年生。一口に言っしまえば電車オタクだ。特に実際に電車に乗る事が好きらしいが、他の四人にはいまいち理解されていない。

もう一人の二年生は呼愛という。名前が差す通りいつも出席番号が一番であるらしいが、一度だけ小学生の時に二番になったことがあるそうだ。趣味は言葉遊びで、枕草子は丸暗記しており、しりとりでは負けたことがないらしい。

残る二人は一年生の双子、八一十と八七三。一十が男で七三が女の二卵性双生児のだが、性格は真逆で一十が手弱女で七三が益荒男という非常に分かりにくい二人である。五人の中で唯一過去に運動部に所属していた七三は、スポーツ推薦でこの高校に入ったはずなのだが、なぜかこの同好会に入った。入ってしまったのはこのもの、らしい。一方の一十は音楽と数学をこよなく愛しており、最近の時間があれば音楽を聞きながら色々な証明を延々と繰り返している。

「今日は、これよ」

そういつて8畳程の同好会室の中でではらばらに寛ぐ四人にプリントを配る美千。

「アニメか」

「理解した」

「面倒臭い」

「意味不明」

四者四様の反応を美千はいつものことだと適当に受け流し、簡単に説明した。

「そこに書いてあるとおり、色々な映画やアニメで地球外生命体が地球を襲っているわ。そこにどんな理由があるのか考えるのが今日の課題よ」

そう言つと、五人は中央に四角く並べられた机の周りに座つた。

「そもそもよ。生物が他の生物を襲う理由にはどんなものがあるかしら」

美千がそう問いかけると、愛が机に突っ伏したまま答える。

「食用、が一番大きいと思うな。あとは、縄張りとか保身とかかな」

「まあ、この場合は明らかに縄張りや保身では無いな。もちろん、領土を広げようとしているのかもしれないが。更に、保身といつても人間が攻撃した覚えはないだろうし、仲間内のことだとしても結局は領土を広げようとしている事になる。つまり、食用だとしてもわざわざこの地球にやってくる理由には不十分だろう」

武須加がそう言つと、一十がぼそつと呟いた。

「非合理的よね」

七三はそれに頷いた。

反対に美千は首を横に振り、長い髪をゆさゆさと揺らしながら言う。

「確かにそうね。でも、山の木を切っていけばどんな木でも切られるものよ」

「と、いうことは」

一十は言つ。

「地球外生命体が出たと仮定した場合は、この地球が地球外生命体に襲われるということよね」

「それじゃ、駄目だろ。というか、友好関係を築こうとするパターン」

ンは無いのかよ」

七三はそう面倒臭そうに言いながら、近くにあったボールを指先でくるくると回し始めた。

「七三、それはまた別の機会に考えましょう。今は何故襲うのか、よ」

「分かった分かった。まあ簡単に言っちゃえば、人間が邪魔だからだろ」

美千の言葉に頷いた七三は、そう言っただけでボールを回しながら椅子の上でクルクルと回った。

「簡単すぎね」

愛が聞こえるかどうかの小さい声で呟いた。武須加は肘を突いて掌で顔を支えながら言う。

「では、意味など無い、という理由ではどうだろうか。そもそも人間も意味のない、娯楽というものを行うのと同じでは？」

「遊びで人を殺す、か。好きじゃない」

「だが、人間も無意味に生物を殺すが、な。あるいは偶然だ」

「確かにそう。ということは、この考え自体が人間の独りよがり、なのかな」

「武須加も愛も、本当にこの議題を理解しているの？ 理由が無いなんて、理由にならないじゃない」

美千がまた軌道修正をする。が。

「理由が無い、ということも一つの理由だわ」

「そうだな。俺も理由もなくスポーツしてたしな」

一十と七三も武須加の意見に同調を見せた。

「な、何言ってるの。七三はスポーツが好きだったのではないの？」

「昔の話だよ。中学の途中から、飽きた。義務感だけだったな、最近は」

「義務……そう、義務なのよ。誰かから命令されたのよ、その誰かの面子を保つために」

立ち上がりながら右手を高々と掲げた美千は、そう言って四人を

見渡した。

しかし、愛は相変わらず机に突っ伏し、武須加は肘を突いたまま目を閉じて惰眠を貪り、一十はいつの間にか用意された紙に数式を書き連ね、七三はクルクル回っているため、誰一人としてその様子を見ていなかった。

しばらくしてもなぜか固まっている美千に、愛はボソツと毒づいた。

「結局、最初に戻るじゃない」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9913m/>

---

地球外生命体、あるいは異世界の生命体が地球を襲う理由を考察する座談会

2010年10月15日23時48分発行